萬葉拾穗抄

七之下

そも〳〵世人の我も泡沫（ウタカタ）なりけりと
おもふあさましきものよりは
こもりくの泊瀬之山毋（ヤマニ）照（テル）月者
盈（ミチ）昌（サカ）為（ス）而（テ）欠（カク）常（ツネ）無（ナシ）
みちうけさくうの人乃（ノ）こゝろ
月乃盈虚（ミチカケ）せるごとく
人も盛衰（サカヘオトロヘ）を生死（シヤウシ）をくり
て常（ツネ）なきものゆゑに
孔題乃（ノ）ふみ（文）の中（ナカ）にて感
思（カンシ）をおこす 則（カリ）曰（イハク）日中（ヒナカ）則（カリ）昃（カタブク）
則（カリ）次月盈（ミツ）則（カリ）食（ハム）天地盈
虚（エイキヨ）與時消息（セウソク）ス
ことをくりてもかく

行路歌一首（カウロノウタヒトツ）

拝本朝臣人麻呂

遠（トホ）有（カヘ）而（テ）雲居（クモヰ）尒（ニ）所見（ミユル）妹（イモ）家（イヘ）尒（ニ）
こゝろもそらにもゆるこひ
しつゝ家尒
早（ハヤ）将至（イタラム）歩（アユビ）乎（ヲ）速（ハヤ）黒駒
をやくいそがせあゆめくろこま

旋頭歌（セドウカ）　作者未詳

後（ノチ）納（オサム）野（ヌ）辿（タドル）葛（クズ）引（ヒク）吾妹（ワギモ）
しつゝもとりさやかに
真袖以（マソデモ）著黙（ツカヌ）等（ラム）鴨（カモ）鳧（ケリ）葛（クズ）刈（カル）母（モ）
よゐてそさてんこそとりもあくすもの

妹の為（タメ）とそ山野（ヤマヌ）尒（ニ）未勤（イマダツトメ）
きりゝ 野（ヌ）尒（ニ）入（イリ）て 真（マ）
菅（スガ）を苅（カル）とりて
乙女（ヲトメ）尒（ニ）あげむと
すてにすてゝ波豆麻君（ハツマキミ）
あゆつまきこと淡路（アハヂ）尒用（ヨス）
とりの赤裳（アカモ）とぬし
刈（カル）よりけんをうんこと
すみのにれをもりすゝ
賤（シヅ）しきものゝいへやに
をもちゐ八束（ヤツカ）穂（ホ）尒（ニ）
のり田（タ）私田（ワタクシダ）とて
垂（タラ）乳（チ）根（ネ）母（ハヽ）

任（ニン）吉（キチ）　波豆麻（ハツマ）君之馬乗（キミノウマノリ）衣（ゴロモ）

雑（サヽ）豆鵐（ムクドリ）　漢女（アヤメ）平座（ヒラザ）而（テ）縫（ヌフ）衣叙（キヌヲ）
さゝがにのおもをすてゝぬふ衣
任（ニン）吉（キチ）　曰見（ミユ）賦（フ）　紫莫荊（シバハギ）曽尼（ソニ）
往（ユク）乃（ノ）可（カ）而（テ）みのをもれ
未通女等（ヲトメラ）　赤裳（アカモ）下（シタ）　開（ヒラク）将往見（ユカムミム）
をとめらがあかものすそひるかへし
住（スム）吉（キチ）　小田苅（ヲダカル）為（タメ）子（コ）　賤鴨無（シヅカモナシ）
すみのえをかりてほすらむしづかもなし
奴（ヤツコ）雖在（アレド）妹（イモ）御為（ミガタメ）　私田（ワタクシダ）苅（カル）
やつこあれどいもがみためわれぞかる
池（イケ）邊（ベ）小槻（ヲツキ）　下（シタ）　細竹（シヌ）苅（カル）　嫌（イナ）
池のへのをつきがしたのしぬをかるいなや
共（トモ）谷（ヤ）君（キミ）　形見（カタミ）尒監（ニミム）　乍（ツヽ）将偲（シヌバム）
ともにやきみがかたみにみつゝしのばん
天（アメ）在（ナル）　日賞（ヒメ）菅原（スガハラ）　草莫苅（クサナカリソ）嫌（イナ）
あめなるひめがすがのかやなかりそね
弥那（ヤナ）綿（ワタ）　香為（カヲリ）髪（カミ）　飽田志付勿（アキタシツクナ）
みなわのかをりがみにあきたしつくな

1278 1279 1280 1281 1282 1283 1284 1285

おもひけるまゝにて作るなるべし（なほ妹子に於ても如此きこえ
池乃音の小櫂の下乃小櫂いまのみ行乃細きこと有うねのわが妹
あのよふなる日とくん泓河（姫菅原菅のうつくきを云姫てし姫ゆり
乃名乃付きもしへゆゑ
一云
夏影房之下庭衣裁吾妹
衣乃乃おやの乃下ころもうつくしも
衣裁乃おやの乃日為ゝ也
裁者羌大
作あやうまれてハ裏
乗儲吾為裁
をうけてこゝろまり
けきてこ差大よそ
ハけゝ
うつさうハの
川ハ筑おもひさう
めやもこゝろの子
やのんこし
うちひさすあちをうち目さすハ花河お注
あのをのことハなと

1285 1284 1283 1282 1281

いとん泓河（ゝ）家ゝ乃ゝ
裳も破りこし支波乃ゝ
きこゝろ
衣まこまくめこハ衣を
まろうこし
ハまち乃まてハのり
拾くよりんこし
拾立乃そゝり山よ
八千矢大和てこ拾立てる
の花河するきこハ拾立てる
心日本紀十隼別皇子も
拾立のさりきこと清
そゝそ乃そゝり
みさりりよ壮士時ゆ
る國の比史記三方
の字をみさりと填

為千力勞織在衣服斜
君
春去何何揖者吉
倉椅山立
白雲
橘立
見欲我為苗立
白雲
橘立倉椅川石走者裳
壮士時我度為ゝ石走者裳
橘立倉椅川河静菅
余苅笠裳不編川静菅
春日尚田立礪公哀
玉緒念委家在矢
打册吾裳破
擊日刺宮路
不絹有目八方卯謂
及採
花
莫謂花
在
引津邊
拌

若草 嬬 無 公 田 立 贏
わかなつむ 妻もこもれや 岡の屋の
開木代 來背 杜 草 勿 手折
とまもる乃 草 勿 手折
巳 時 立 雛 榮 草 勿 手折
その子ども 菜つまずあらむ
青角髮 依 細 川 原 人 相 鴨
あをみつら よさみの人よ あるも
石 走 淡 海 縣 物 語 爲
あるらむ 淡海の おのが
水門 葦 末 葉 誰 手折
みなとなる 葦乃末葉を 誰ぞ
吾 背子 振 手 見 我 手折
わがせこが ふるてを見ん と我ぞ
あをみつらよさみの人よあるもあるらむ淡海のおのが水門なる葦乃末葉を誰ぞ吾背子振手見我手折

明神と云社の
あきつ神 社の
あを山乃 かけき山へ
山邊 馬 安 君
青 山 葉 茂 垣 越 犬 呂 越 鳥 獵 爲
かきこえ 犬よびこえて こりすまき
海 底 玉 藻 之 名 乘 曾 花
わたつみの 奥藻の名乘 そ花
妹 與 吾 此 有 跡 莫 語 之 花
いもとあれ ここにかもこと ふるなのりその花
此 乃 岡 草 苅 小 子 乃 所 念 然 苅
このをかの 草苅こらが おもへらく しかり
有 作 君 來 座 衛 馬 草 爲
あるらしき きみこまくさ ためかもん
江 林 次 完 也 物 求 吉
えをしげみ つぐもの もとめよき
白 枌 袖 纏 上 完 待 我 背
しろたへの 袖まきあげて まつよわせ
九 雪 降 遠 江 乃 吾 跡 川 楊
ここのえの ふるとをつあふみの わとかはやなぎ

今日こそは 妻の未架 自向 有 者乃 多 漆の葉の末を誰ぞ折 二 問
けふこそは つまのもがさ むかひあり とかも漆の葉を誰ぞ折 二 問
心 わすれ 草 乎 垣 乃 ふるを 我 背子 と 見る
こころわすれ草を かきのふるを 我せこと見る
かきこえて 犬よびこえて こりすまき
垣越 犬 呂 越 鳥 獵 爲
青 山 葉 茂 馬 安 君
あを山乃 かけき山へ
山邊 馬 安 君
奥 玉 藻 之 名 乘 曾 花
わたつみの 奥藻の名乘 そ花
妹 與 吾 此 有 跡 莫 語 之 花
いもとあれ ここにかもこと ふるなのりその花
此 乃 岡 草 苅 小 子 乃 所 念 然 苅
このをかの 草苅こらが おもへらく しかり
有 作 君 來 座 衛 馬 草 爲
あるらしき きみこまくさ ためかもん
江 林 次 完 也 物 求 吉
えをしげみ つぐもの もとめよき
白 枌 袖 纏 上 完 待 我 背
しろたへの 袖まきあげて まつよわせ
九 雪 降 遠 江 乃 吾 跡 川 楊
ここのえの ふるとをつあふみの わとかはやなぎ

雑歌 (朩) 生云 吾跡川楊

かくしつゝもあらまく生云おほ川楊

朝月日向ふの山 月立所見

多武の峯ひむかしの山ゆ月立ちてこゆ

遠妻持在人 看乍偲

遠妻をもつらん人やながめつゝ偲ふ

作者未詳

春日在三笠乃山二月 舩出

かすがなる三笠の山ゆ月の舟出

遊士之飲酒盃介陰介所見乍

遊士の飲酒盃に陰にかけつゝ

これやこの乃武吉よかけよとて

月をよみ酒を飲めるこの夜の興は尽きずもあるかも

右一首 或云 柿本朝臣人麻呂歌集出

或本歌曰 月見而 飲酒盃介 雲隠

月を見て酒盃に雲隠るまで

右一首 或本歌 作者未詳

譬喩歌

寄衣歌八首

柿本朝臣人麻呂

今造 (古) 衣 面 就 (継) 早

いまぬへる衣の面もいまだしきに

人の来つれば 紅 (吾妻乃所念妻乎未服) 裳 欲

わぎもこがおもへるいもをいまだきねねと

着 丹穂 哉人 可知

きそめにほやる人の知るべく

千名 (ちなとよめるは人名をいふなり) 付 織 次

ちなつく人を織らしめ

我 二十物 白 麻衣 仙 (ちろあさごろも)

わがに着るものしろき麻衣

継者 (ままなるを) 麻衣 仙 (ちろあさごろも)

ままなるものしろき麻衣

着 (ぬ) 人 知 (ぬ) 者 (ぬ) 欲 (ほし) 我

着る人しぬへくほしき我

1316 1315 1314 1313 1312 1311

ちなかは色人ハみなそれ　いろ色乃色ハ御定さまりて名あかして人ハいひならハす
ゑもことりけらんこハ織りあやまれ麻衣をおかなしハつくハやすしとぞ
さる名まハさてしてるも何にいまぞいふいへの心を白麻衣より
こころよめり係切ふらふへをよせいひしてわか橡衣をよめり
仙覚ハこハのなはやみぶらまり八やおもむきのきぬとる
仙覚ハちろあきこえし
つるはみ乃きぬまし
和名抄色具云橡（ツルハミ）櫟實也
童蒙抄云つるはみ（ウヘノキヌ）とハ四位乃袍をいふし
昔ハ四位ざてる人ハこれあれどおかるけれてハ
引ハれさかんれハいひくよめるとこ　祇曰昔ハ四位
ちそ橡乃衣まハ今ハ上らと引かさる也　哉益

作者未詳

1311 橡　衣　人者　事無　跡　曰師時従　欲服　所念
つるはみのきぬまし人ハことなしと
いひしときよりきまほしくおもほゆ

1312 凡　介　吾　之　念　者　下　服　而
穢　介　師　衣　乎　取　而　将　着　八　方
おほよそにわれしおもはゞしたにきて
なれにしきぬをとりてきめやも

1313 紅　之　深　染　之　衣　下　着　而
上　取　着　者　事　将　成　鴨
くれなゐのこそめのきぬをしたにきて
うへにとりきばことなさんかも

乃まさけく　ありこえちとなりてとりと人のいふちちてはなをあらはして
おほようにいまし八助字之　おほよそちかすと云人のをさなれ人
をさとらにもてなやすなまことふ思を認りよくてよめるし
それなぬのことなれ　仙曰紀乃ことなれ衣とかゝきてとハ心さし係れるも
よしと思ふ引をとかくまるまこそ書を定て引いを上まれきるあさきかき要
まちあんとハ臓する也
つるはみ乃ときあらひ
仙曰つるはみを衣すまひ
ぬるゝもいかるハかりと
き洗ひきぬとハ一入め
つりしぶてるにを
へくけやきつるも緒小き
ゆかりきもとこふ　素ニ
こなまあらしさてとき
洗ひし橡乃衣まも
猶はいかりかきぬや

1314 橡　解　濯　衣　之　恠
殊　欲服　此　暮　可聞
つるはみのときあらひきぬのあやしくも
ことにきまほしきこのゆふべかも

1315 橘　之　嶋　介　之　居　者　河　遠
不曝　縫　之　吾　下　衣
たちはなのしまにしをればかはとほみ
さらさでぬひしわがしたころも

寄絲歌一首　作者未詳

1316 河　内　女　之　手　染　之　絲　乎　絡　反
片　絲　介　雖有　将　絶　跡　念　也
かふちめのてぞめのいとをくりかへし
かたいとにあれどたえんとおもへや

橘乃洛ノ一ならい仙台橘乃洛ハ伊与玉宇摩郡ノ山寺伊与玉乃風記乃ごとくあるハ息長足日女命乃御製ニ素仙ありし寺のごとくなるべしそんなる作者ハ孝ごとおもふ裏ひ寺のたゝずまひもうつくしくおもふ人の御玩涼切よ作る花山寺も橘乃洛ハ河かをきねさうさんやうなさたにけるそねひまるりこと斗ゝくなりむしろ心乃ゝ人れと細出ことをく寺の狗もあさを奨金せんやうなるへしまた今集のうゝ寺ハ梅の寺ハなら王仁のおほさまの帝とうゝなるとゝ出ゝまてれいこうゝ心ゝ作るごとくなるめりと深の糸を一こんこおりゝや絶乃ゝまもれハ堪乃ゝなるも万葉乃みまほしひこ例おまもある古作糸ハおれこのやとく移しゝ斗ハんこゝろ一こゝ心俱ゝ寺類聚万葉ハいくふあるとゝ移んこゝろなるこゝりをてゐん念也こゝろゝをと和ゝ例ゝ斗ゝまゝ同間心間哉ゝゝおめへうゝも心へうゝと和ゝり也ゝ哉ゝゝおまよりれゝもゝよゝ心しひうゝゝ又見安ハ河内女ハ神也ゝ此ゝ此ゝ女ハ非ゝなめのれ也御ゝゝ寺ゝまよりれゝゝんゝゝやゝハ並ゝゝるれゝと移んゝと

寄和琴歌一首

作者未詳

ひさかたの玉之小琴之事無者
甚幾許吾将戀也毛
いとそらわりこひめやも

寄弓歌二首

作者未詳

陸奥之吾田多良真弓着絃而
引者香人之吾乎将成
ひけとも人ハれをこと
南淵之細川山立檀弓
末級不所知
ほらまくにハ人ハ

ふいめそうゝゝみゝ
こゝりゝ山壁ハさもゝゝ
うゝや

ひさかたの玉の小琴乃
事なくハいとそくく
おの玄琴のとよもよ
りり仙台りりおもい返
りりてりりまゝゝる
りりせゝゝとゝ山寺哉
本寄玉乃おもひ
みちのくの乃ゝ
柚中物云吾田多良 陸
奥よりも亜ゝ絃固音
枕よハあゝらね有
神峯也ゝ山寺下句
柚中物ハひゝゝゝ人の

とのみもこれ兄弟四人序次人をも引そへてこうをこうけさせまつりそへたれ先ひさ心乃んとと童蒙抄三冊こと也まさもちて行こうち乃白まうとと
いへ先も八宅抄三冊こうしかあるとこと一冊こうしみく仕まつりうし
ケあるうち乃ケ川山よ立檀弓東級 類聚万葉六巻六立檀弓巻第六 エダ
し同九弓乃握華小くとゆつりまくことをつりまくこうもるこ八宅抄云みまる
山ちまんみちうも云大和乃ケ川山同ことこ哥乃心八我つくいりよりうもを
我良につるまて人うまくうもうもうち乃哥二首し千本和琴乃うの下
寄山恋 ルヲ 寄玉歌十六首

柿本朝臣人麻呂

安泊村 十 依 海 船 浮
いちしろく人乃こと乃るまて海よりこけて
白 玉 採 人
白おをうつ公喩て 所知勿
安比て逢ぬうんと人
遠 近 磯 中 在 白 玉
よもうまくうもうもやとちこ我乃つつのまり
人 不知 見 依 鴨
そもりうみ人をまつこと

海神 手纏持在玉故
わこ我乃まてきこもるゆへうり
乎 海神 持在 白玉 見 欲
いうこ乃みうりうるしつまくうり
手纏 為 潜 海子
ちはやふる神乃ひさこうるこうり
潜 為 海子 雖告 海 神
かつさするあまのいくくもわこれ
心 不得 不云
こころをえすくもとうくふ

こうして人言乃をも兄
ううりき心を法そや
わこう乃のふかき
磯浦八宅抄紀伊と
物摸乃玉集城中と
わこう乃のふかき
むこ八海竜王乃珠を
持り内あの言みも
いうこき人と云るを
へちや仙おの磐と云
わこうこと八母をこう海乃心母乃ひとこうす海こうり乃つまくみの
す也我の浦こふかつまくすること也こうして同乃海よ八ひ喩こ餘ん
うこ乃ケ乃うる 蜜こうるなも告こ海神の宝珠をこうもち
こも玉こと礼もこと ゆこうまくと法こうして妹を面こうりうく礼し喩こう
乃つまくするあまお告心をはとそいこと 乃ケ也添て心乃つまくこと妹し
まむのこうと告こうもる人乃心をはとていえこうこと乃まくも

ちんと欸〳〵心やゆかう乃わつこれりてゝもれ乃修そこよ
めるやうこゝろこゝろ計れ九おの乃乃修そてゝ心まの乃れハ出
ゐつてゝもゝ　山きり玉ゝ音イ本ゝそ名ゝそゝ人ゝゝつゝされ下吉本
哥乃上り乃ゆ

作者未詳

わつのうこゝろてゝ白玉　海底沉　白玉風吹而
修てゐゝこのゝゝりり　海者鰒鰒　不最　者玉
ゐてゝハれりゝ心ゝ
こゝ成ゐち教の浪　底清ぎよき沈　有玉乎欲ゝ見
仙白玉をゝこゝろる
ハ如留凡吹て海ゐゝゝる　千遍首告之潜　為　白水郎
もしこハ蚊ゝゝれ
れゐんこゝろみよ嘗ゝ　大海之水底照之　石著おくや玉
うこゝはみゐつめゝをゝ　齋而　將採　風莫吹行宇
ゐハゐのりゐゝ日　水底尓沉　白玉誰故
ゐりうみのみうこと

心　盡而　吾　不ゝ念　尓
こゝろ沉てゝもりゐりゝゝの
世間　常　如是　耳加　結　大玉
よれおゝハれねゝのゝりむよゐまみ
白玉之緒　絶　樂　思者
ゐゝゐりをのゝゆゝゐりゝ

ゆりひおハ蛇乃含ゝ真
珠也いゝりてゝんこゝゐ
りはきてゝんこゝィりゝ
玉ハ阿古屋の玉ゝゝり
ゐゝゐ人をゝゐりゝ
なりゐりゝこゝて清凡
みゐうこゐゐりゝ白　盛のおを玉りゝゝて沉ゆゝ心ゝゝ我り
ゝふりりすゐゆゝうこゝゝゝ仍尓の西ふゝちゝりの尊心
祷りりりのうゝと又ゝ　仙白山哥りゝゝゝつゝもゝと玉ゝせりおゝと
参議濱成卿歌經標式ゝり山包を最那曽已幣一句青都倶肯羅他麻二句
他我由恵介二句已已倡都倶肯互罰和我毛波那倶爾ゝゝりゝゝ白ゐと
ゝゝるハ古清こゝゝりゝゝゝとゝり同音相通乃義ゝりゝゝ
第二句の其刀歌式ようゝゝし下畧
よりのゐりゝれねゝのゝう　我ゐ乃修れ延ゝゝゐゝゐりけをゝゝ
ゝこゝハ祈ゝゐゝりや哥の心ハ世中ゝ常りゆゝのゝこゝゝゝ令
もゐふみとゝゝゝ

伊勢　海之　白水郎之　嶋津我　緩　玉
いせのうみの　あまのしまつが　ゆるふ　たまを

伊勢乃海にあまの
島津は二ハ島人也
東人をとりつよりと云
ようこそし玉を心ふ心て心
をもつし人乃年をえは
深くひ増るに喩る也
わたつうこおきつ白玉
海底の玉ともあらしお
きと君をゆつきと作り
あきらかにて詠也
ゆのねもころ
芦乃根ハねとつらん諷
根を延しりひて結ひ
しけをそのときに妨る人やなりんと危き故玉緒とつなぐ人ともなせん
とものわらえるも
玉とりとらへは 又要云 玉かれハ見かれし 万葉 玉切れハ玉

1323
取而後毛可恋之将益
とりてのちも恋乃まさりけらん

1324
嶋津ハ嶋人也
海之底 奥津白玉 縁乎無三 常如此耳也 恋度味試
わたつうこおきつ白玉よしをなミつねかくのミやこひわたりなん
葦根之懃 念而結義之 玉緒云者 人将解八方
あしのねのねもころおもひて結ひてし玉のをといへハ人ときめやも

1325
白玉乎 手者不纏爾 匣耳 置有之人曽 玉令泳流
しら玉をてにハまかすにはこのミにおきたりし人そ玉およかする

持ちつ持ちるさまよかかめくし君をゆるつり隠して見かわれ
するをよめるにや
てるさつもまきつ
袖中抄云照左豆ハ人の
名也環とし麗て
いふをよめるなし
仙日てるさつハよき
砂すなごをいへる
古すとハさひすると

1326
照左豆我 手爾纏古須 玉毛欲得
てるさつかてにまきふるす玉もかも
其緒者替而 吾玉爾将為
そのをはかへてわか玉にせん

1327
秋風 若継而 莫吹 海底 奥在玉乎 手二纏左右二
あきかせはつきてなふきそわたつうこおきなる玉をてにまくまでに

こゝろを玉の緒ハ人とてるさつか持るハ持玉とせんとなり
秋風ハつきてな吹そ 仙日秋風ハ続きてな吹そとハ悲きさましめ
常にありと云し沖なる玉をまきてまつほとハ浪ぞ人まなん
しまてなといふも 一本ニ作者未詳乃わたつうこまてとりかへ上ニ
首寄縁乃下寄和哥の上

寄山歌五首

作者未詳

みやこわかれ
そこまてかとまさ

（朶）（山常知管毛）
いとたかき山とさとりけるを
（吾者戀）（香同等）（不有）
われをこふるりうしもあるまよ
（金之）（擬木）（敷）（山介入）（始）（而）
いとねのこころをきて山よりうめて
（山名付）（湫）（由）（不勝）（鴨）
やまのもみちてくぬる

山舟類聚万葉
（恐）
いとたかき山とさとりけるを
童蒙抄神祇部にこりもくと山ことさ集十三ともいとねのこと
そうくことはを擬敷こりはも神祇部にいとねの出乃根こと云
ひねのこころくいはうくと磐金ともいとねのこと
こりもくとこの擬敷こりはも根乃こと云
ひねのこころくいはうくと磐金ともいとねのこと
ともも同ことも舟の心に出根こと云
一ことひねのこころくいはうくと磐金ともいとねのこと
うちんいうひねのこころくいはうくと磐金ともいとねのこと

さか山をおりはうと
仙宮おりはうくに大
形ふきうくに風吹
おもひとけは山をもて難
か諦んとめおと心はよ
そ兵大方ふひとを
近ふさうてるうき
りくふも
おくやまれいとふみ
類聚三おろうそそ
りこみ日心才二句いりこみとそん祇ふそ人もゆそねやをあや
ふらておろうくをもりふりよせうそ
ふひおりいもすふみ仙曰山ふ第一巻三百乃舟の心をとりてよめる
やまふきくよふひおりいもすふみ仙曰山ふ第一巻三百乃舟の心をとりてよめる
玉東
かくふいうおひいこみちうくふ舟乃ふ類聚か
しふゆふとうとふ出ふ心成本三山寄山五首寄山ふ歌の下寄草

佐保山平於九介見之鹿跡今見者
さか山をおりはうとしこれをも
山夏香思毛風吹莫動
やまのもみちてくぬるゆめ
奥山之於石蘿生恐常
おくやまれいとけふこのころみと
思情平何如愛歎武
おもふこころをいかにもせん
思曉痛毛為便無玉手次
こひのちいらもすへなみたすき
雲飛山仁吾卯結始
うねひのやまにわれもうちあけめやも

寄レ木歌八首　柿本朝臣人麻呂

天雲棚引山隠在
ありまもるよしもがもや
高山を隔れ入る妹も

吾忘木葉知
わすれぐさこのを志るしん
わすれめやかくらぬ

雖見不飽人國山木葉
みれどあかぬ人國山の木の葉
これとあらぬ人もしもかも

已心名著
おのこころなつくなるらし
をのうらなつく

作者未詳

白菅之真野乃榛原心從毛
しらすげの真野の榛原心ゆも
さらすげの

不思君之夜者不寐
おもはぬ君之夜は不寐
おもはぬ君のよるもふるす

神中柞乃榛原不日不久
かみなかの柞の榛原ふかずとも
神なかの

去年咲之花乃盛尓
こぞさきし花の盛に
こぞさきし

八千桙神
やちほこの神
八千桙

人國山八束小手纒
人國山やつかこて纒き
人國山

被曰之人乃
かづらきし人の
かづらきし

作者未詳

真木柱作蘇麻人伊佐伊目册
まきばしらつくるそまひといさいめて

借廬之爲跡造計米八方
かりほの爲とつくるとはかめやも

向峯乃上有桃樹成哉等
むかつをのへにあるもものきなれやと

人曽言爲汝情勤
ひとぞいふなが爲と情つとめて

足乳根乃母之其業尚
たらちねの母のそのなりを尚

願者衣著常云物乎
ねがはくは衣きねとふものを

波之吉也思家乃毛桃本繁
はしきやしいへのもも本繁

花耳開而不成在下枝取
はなのみさきてならずあらめやも

向岳之若楓木乃
むかつをの若楓木の

寄木歌八首　柿本朝臣人麻呂

天雲棚引山隠在
あまくもの棚引山の隠れる

吾忘木葉知
わすれぐさこのを志るしん

雖見不飽人國山木葉
みれどあかぬ人國山の木の葉

已心名著
おのこころなつく

作者未詳

白菅之真野乃榛原心從毛
しらすげの真野の榛原心ゆも

不思君之夜者不寐
おもはぬ君之夜は不寐

大和名所也寄木寄草不寄死人上生
大和名所也寄木寄草不寄死人上生

榛原萩原同寄木寄草不寄死人上生
榛原萩原同寄木寄草不寄死人上生

二首一本三首雲歌曰
二首一本三首雲歌曰

去年咲之花乃盛尓
こぞさきし花の盛に

八千桙神乃榛原不日不久
やちほこの神の榛原ふかずとも

人國山八束小手纒
人國山やつかこて纒き

被曰之人乃
かづらきし人の

神中柞乃榛原不日不久
かみなかの柞の榛原ふかずとも

去年咲之花乃盛尓
こぞさきし花の盛に

八千桙神
やちほこの神

人國山八束小手纒
人國山やつかこて纒き

被曰之人乃
かづらきし人の

作者未詳

真木柱作蘇麻人伊佐伊目册
まきばしらつくるそまひといさいめて

借廬之爲跡造計米八方
かりほの爲とつくるとはかめやも

向峯乃上有桃樹成哉等
むかつをのへにあるもものきなれやと

人曽言爲汝情勤
ひとぞいふなが爲と情つとめて

足乳根乃母之其業尚
たらちねの母のそのなりを尚

願者衣著常云物乎
ねがはくは衣きねとふものを

波之吉也思家乃毛桃本繁
はしきやしいへのもも本繁

花耳開而不成在下枝取
はなのみさきてならずあらめやも

向岳之若楓木乃
むかつをの若楓木の

花待 伊周 介葉 鶺鴒

[illegible]

寄草歌十七首 作者未詳

冬隠 春乃大野乎 焼人者
[illegible]
焼不足 香文吾情 熾
[illegible]
葛城乃高間草野早知而
[illegible]

[illegible]

[illegible]

擬拮益乎今悔拭
[illegible]
番屋前尓出 土針 猪心毛
不想人之衣尓須良由奈
鴨頭草毋眼色取揖目伴
[illegible]
物爾登稱之苦沙
紫絲乎曽吾攘足擔之
山橘乎指貫跡而
[illegible]
真珠付越乃能皆原吾
[illegible]
人之苅巻惜菅原
山高夕日隠一本奴浅茅原
[illegible]

後見多米介標結申尾

のちらんこめよもりゆくまでと

事にも痛者尤介ふ右捨為半石代之

ことくくいふらむ（せんといふをもろ乃

野邊之下草吾之荊而者

のへ乃もとくさわまつりてそ

紅之爲心哉於妹不相將者

一云それなれうへ心やはなさん

真鳥住分名手之神社之菅根乎

まくりすてうるてれねるを

衣介書付令服兒欲得

さぬるのかさにけさせんこもなな

もろ〳〵人をはこもちまくまさねをこりつゝもんくそれぬの月

ことくくいふらくせんとそこゝろ作り紀伊こわれ

乃一うりてはのそくゆきとも

紀乃野の草とも

紀乃国人のこゝろ

一云紅のうつろひやすくこゝろ

ふりもりもちもせんとそのう手我心や持りうらはさむ

くんいまそくやしさとの心もや

きくりすむうそのもり

紅に紅ふかくこうつこりん染

杜とよめり

多則りを仙覚はいふまいかゞとこゝろ

うるての森日おもこゝ我日山ふの乃心ふのねれやうふ心をちくく

我ふうてゝ書こちるみものをとよろ〳〵

或説称の往海を染ふりとこ

これねちくねくふる

常不入國山乃秋津野乃

ねひとくふこ乃ねやしの

掌ちくねくふこいん

泥河こ公堂常乃

垣津幡鶯夢見鴨

なさにけるをしめふらるも

ゆゑあれハ也人女山ハ八雲抄紀伊とし狂若を君にたとへたること とみゆへしさる江への葛布を織人の心にや いつかくりてきぬに ての見袖回いつか我も むひれて身にきさら わかみのんとこそ思へ

1346
姫押 生 澤 邊之 真田葛原
をみなへしさきさはのへのまくすはら
何時鴨 絡 而 我 衣 将服
いつかもくりてわかきぬにきん

1347
於君 似 草登 見従 我標之
きみににるくさとみしよりわかしめし
野 山之 浅茅 人 莫苅根
のやまのあさちひとなかりそね

1348
三嶋江之 玉江之 薦乎 従標之
みしまえのたまえのこもをしめしより
己我 跡曽 念 雖未苅
おのかとそおもふいまたからねと

1349
如是為而 也 尚哉将老 三雪零
かくしてやなほやおいなんみゆきふる
大荒木野之 小竹 不有九二
おほあらきのゝしのにあらなくに

まみにたる草としきこえ名ヘ茅ハ詩に女のたとへに喩へし詩碩人篇云手如柔荑 荑ハ註茅之始生日荑ト言柔而白也とやうのよせなくやうにあきを見にするとしめるや 千とせ江の玉江の八雲抄は皆波出の名にをひつけたる我も千とせにかくや身とかくや

大荒木野 八雲抄山城とこそ我の所のさゝちなるや

そちなんとハ只みやきとやん也此森のさゝハくさ人かけるきをえひとつらしかりしれをもるとかうかけんとあけらしふ女乃しけるや何みのや庵をせの矢橋と矢を名むかの不乃世竹と矢よそ此ぬを得んにきミ縁み陰人よ逢ねよ喩相譲るとえりしと男を振いまとこそとや不用 汗中に苦をよ衣いすらん

1350
淡海之 哉八橋乃 小竹 平 不造矢 而
あふみのややはせのしのをやはかすて
信 有得 哉 戀敷 鬼乎
まことありえんやこひしきものを

1351
月 草 尓 衣 者 将摺 朝露 尓
つきくさにころもはすらんあさつゆに
所沾 而 後 者 徒 去 友
ぬれてのちにはうつろひぬとも

1352
吾情 湯谷 絶谷 浮蓴
わかこころゆたにたゆたにうきぬなハ
邊毛 奥毛 依勝益士
へにもおきにもよりかつましし

童蒙抄云月草とハ梅花としされハうつろふとハ色のさめ一花心変りをもいひ人をよそへてよめるなるへし わか心ゆたにハゆるふ此歌乃説此句依勝益士ヲ八雲抄袖中抄童蒙抄哥林良材等ニハよりかねましと和せり 仙点ハよりかつましと和ス誰か

童蒙抄云ゆふかつらかけそうこきしくゆふ心歟哥枕云陸奥ゆふれしゆふ
ゆふ神中務云古今集ゆふのさゆふかけて思ふ心歟奥儀抄云陸奥の浜
てとくゝゝうきてとくゝゝ物をやりゆふ浮ぬかと苦菜ちり
地よ浮てる事をれい浪ふよゆふをいのみくゝゝうきもの事
うきもきをとくゝゝ張り右寄草十七首一本小なりひおもいもて
あすの下寄稲の上小在

この山乃とみちれなあ
寄花歌 七首

柿本朝臣人麻呂

是山黄葉下花矣我
こ乃山のこ下れ花をわら
小端見反戀
をくくかつる恋も

作者未詳

氣緒介念有吾平山治左能
いきの乃をよおもふわれを山ちさ乃
花介香君之移
花奴良武
そもそもきこそうつろひぬ

墨すみ青之浅澤小野之垣津幡
すみの花あさ沢小野の垣つ幡
衣介摺着将来月不知毛
きぬにすりつけきん月しらず
秋去され者影毛将為跡吾蒔之
あきさらばかげもせんとわかまきし
蘿蔓之花乎誰採哀牟
つるあぢの花をたれつまん

山治左いちさの花白
花物思ふ姿物をもる
思ふ心よりこそ
令小勉て心我を
うつろひうるはし
すみの花あさ
浅沢小野物は集
十七首
きぬすりにけり
きぬすりつけ
をのうつろひ
をすつき月と心を
おりんという心
あきこ乃ふかけ
とふひ幸主のむすきを歌
春日野介咲有芽子者片枝者
かすの野乃はきもる萩のうつろへ

ことおもしろうこそ
いひつゞけたれ
ちとたしなみうそ
萩の露しみ〳〵
こぼれ出て救
舎(ヤド)しかねつるをこと
そゝしあるまじきこと
うみやをれ折もふし
ま(間)ぬ心のほどの
ほどもなくうき
わきもこうやの
足安(あし)みのちゝはゝ萩
ほしめやとよめるこゝろ
ふかう
いうのこゝろかよわさ由
石上布(ふる)の大和(やまと)童蒙
抄云不秀(ヒデズ)ともよく
ようすともとりつゞき
也 万葉論語(うら)苗而不
秀者有詩穀之始生曰
苗吐華(ハナ)曰秀(ホ)
まめいはゆる
ところにはあらず心
ていすともこゝにあるべき
里ともいふべからず
いはゞ初ごろ
寺一本紅(くれない)ゆふさ
ゆの下帯木の上ゝを
ゆふ川もゆの
七瀬淀(よど)いかだの
乃よし舟(ふね)筏(いかだ)日(ひ)もる
笭(かご)明(あか)し松(まつ)焚(たき)
書(かき)とゞく法(のり)ひく
うれしさよ

未
舎有言勿絶行(ユク)平
歎見 戀 管待之秋草(ヲミナヘシ)者
花 耳開 而 不成 可毛 將有
吾妹子之屋戸之秋芽子 自花 者
實成 而 許曽戀 益
家礼
みかきりこゝろいやまさりけれ
あすこゝは宝(たから)をわすれ心(こゝろ)
わきもこうやの 足安(あし)みのちゝはゝ萩(はぎ)仙日娘(おみなへし)
ほしめやとよめるこゝろ 志(こゝろざし)ふかう
いうのこゝろかよわさ由 右作者未詳六首一本ニハ
石上布(ふる)の大和(やまと)童蒙 寄稲(ね)歌一首 作者未詳
抄云不秀(ヒデズ)ともよく
いうのみやまもれわさ田を
ひやく

縄(なわ)ばる谷 延興守作(ツクル)居
寄鳥歌一首 作者未詳
明日香川七瀬之不行(ユカ)余住(スム)鳥毛
ゆるす川ものよどむ
意有社波不立目
こゝろあれそうみさゝろ
寄獣歌一首 作者未詳
三國山木末(こぬれ)余住歴(スミヘ)武儲尓(ムカ)処乃
みやまこすゑもすむさるの
待鳥如吾待(マツ)將痩(ヤセ)
ものおもひまさりこゝろわのまちやせん
寄雲歌一首 作者未詳
石倉之小野従(ユリ)秋津余發渡
雲西裳在哉時乎思將待(マチ)とまつ
雲ありとあまつやこさを

あけ立八波ゝゝゝゝとりつゝ彼をおくゝゝ我中をしばゝゝねぶ吟之
山寺吟下一本三寺花乃わもこのやその杜森乃下乃仮ゝ
みくぶ山 八宝抄抜はこをひさゝひろを食する物し飢(キヽ)鼈のる物好くを冷る
いくゝのものゝあるつゝ 八宝抄出城ゝゝ山歌類聚二八ゝの秋はぶかと和す
仙覚本ニハこゝとちるもや但このち諸集ゝ入ゝ寺はもゝの杜はもし洗り
類聚乃ゝとりゝのゝとりゝを一首中や寺乃忘八瑞雲ハ帝徳乃ふる
時をまちくゝ出るこゝ八時を待やのこゝゝ我と時寺をゝんと

おくやふかくゝ

寄雷歌一首 作者未詳

雷光乃なりうるき
をとりけてやふ人乃
ゐてれいこれいかゝ
ゝ見ねくもありさゝて見
ねいくるゝとし

(雷ニ)

(天雲近光石或作響神之見者恐ゝこと不見者悲ゝ毛)

そおりゝもゝぬ我
和名源(ニホンミ)雨水也八宝抄ニ
在ゝ方ふかよりゝ

(甚)

寄雷歌二首 作者未詳

(多毛不零雨故庭立水莫逝人之應知)

(太)

いくおゆきうゝのゝ

寄月歌四首 作者未詳

(三空徙月讀壮士夕不去)

ゝゝゝ月よゝゝゝ
日庭雖見因縁毛無
ゝよゝれゝもよゝゝ

(春月山高有良之石上菅根将見今月待難ゝ)

すゝ乃ねゝゝ月ゝ
闇夜者辛苦扨乎何時
ゝゝ乃ゝゝゝゝ

(吾特月毛早毛照奴賀)

わゝゝ月もゝゝ
朝霜之消安

(食為誰)

ゝゝ者乃ゝゝゝ

(久堅之雨尓波不著乎怪毛)

ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

(吾袖者于時無香)

ゝゝゝゝゝ

久堅之雨尓波不著乎怪毛
久ゝゝ乃ゝゝゝ
吾袖者于時無香
ゝゝゝゝゝ

寄月歌四首 作者未詳

(三空徙月讀壮士夕不去)

ゝゝゝ月よゝゝゝ
日庭雖見因縁毛無
ゝよゝれゝもよゝゝ

(春月山高有良之石上菅根将見今月待難ゝ)

すゝ乃ねゝゝ月ゝ
闇夜者辛苦扨乎何時
ゝゝ乃ゝゝゝゝ

(吾特月毛早毛照奴賀)

わゝゝ月もゝゝ
朝霜之消安

(食為誰)

ゝゝ者乃ゝゝゝ

千歳毛欲得跡吾念莫國

ちとせもしりなとわかおもはくふ

右一首者非譬喩歌類但閨妾夜

歌人所心之故並作此歌因以

此歌載出此次

勿雲隠清月従伴清月念許

右一首者非譬喻歌也但月歌之類故以次之

大和乃尼安吾只大和乃

野乎過而遠乎

丹者赤土乎曽所

赤土乃所染我

丹穂乃色尓

寄赤土歌一首 作者未詳

山跡之宇陀乃真赤土 左丹着者

曽許裳香之吾乎 将成

寄神歌二首 作者未詳

三諸乃神八日本紀曰吾

欲住於日本國之三諸

山故即營宮彼處便

就而居此大三輪神也

三諸乃神乃備而

木綿懸而祭

神社

可趣

可毛

之繁

可有

人有

寄河歌七首 柿本朝臣人麻呂

従此河

渡瀬別

1379 1380 1381 1382 1383

作者未詳

不逝有者 逝 明日香川之 不逝有者
こえとゝくつゝもれゝのゝとゝもゝくゝ
故霜 有 如人之見 國
ゝゝゝゝあゝゝゝ人乃ゝゝくゝゝ
明日香川 瀬 余王 藻者 雖生有
あすゝゝ川 せゝゝゝゝゝゝゝゝゝれと
四賀良美有 者 靡 不相
ゝゝゝみあれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
廣瀬 川 袖衝 許 淺 平也
ひろせゝ神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
心 深目手 吾 念ゝ 有良武
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
泊瀬 川 流 水沫之 絶 者 許曽
もつせゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
吾 念 心 不遂 登 思曲目
わゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
名毛 伎世婆人 可知 見 山川之
おけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

1384 1385

神風乃 名乎 他 母 奈
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
瀧 情 平 塞敢 而有鴨
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
水隠 公 氣 衝 餘 早川 之
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
瀬 者 立 反 人二 狩言 八方
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

寄木二埋木一歌一首 作者未詳

真釰 持乍 弓削 河原 之 埋木 之
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
不可顯 事 公 不有 君
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

寄海歌九首　柿本朝臣人麻呂

大海　水門　事有
おほうみの　みなとのことの
從何方　吾　寧
いかにおもひか　わがおもはなくに
君　明日
きみがあす　いなばわれこふ
風吹　荒　言
かぜふけば　あらきうみぞと　いふべくあるらし
應久　隱
ひさかたの　くもがくりにき
雲隱　小嶋　神之　恐者
くもがくる　こしまのかみの　かしこくは
目間　哉
めのまに　こころへりつる
大海　護
おほうみの　まもりのごとく
水門　事有
みなとの　ことあれや
君　凌
きみがゆき　ながくなりぬる
風吹　海　荒
かぜふけば　なみのあらきに
明日　言
あすといはず　いにしへゆ
應久　隱
ひさかたの　くもがくりにき
雲隱　小嶋　神之　恐者
くもがくる　こしまのかみの　かしこくは
目間　哉
めのまに　こころへりつる
おきつなみ　よるくるごとに　あがこふる
君　明日
きみがあす　いなばわれこふ
大海　護
おほうみの　まもりのごとく
水門　事有
みなとの　ことあれや
君　凌
きみがゆき　ながくなりぬる
風吹　海　荒
かぜふけば　なみのあらきに
明日　言
あすといはず　いにしへゆ
應久　隱
ひさかたの　くもがくりにき
雲隱　小嶋　神之　恐者
くもがくる　こしまのかみの　かしこくは
目間　哉
めのまに　こころへりつる
おきつなみ　よるくるごとに　あがこふる
君　明日
きみがあす　いなばわれこふ

おきつなみ　よるくるごとに　あがこふる
君　明日
きみがあす　いなばわれこふ
類聚万葉童蒙抄
たぐひなきこころ　仙臣ハ
祇曰大夫ハ心安き心也きふ
しとふ神なりくんこ我
立ちくらん　より沖ハひてもみひかうきをうつ
みてかひりやりおを　仙みてもとハ上古ハ足柄ハこうちこと
こて足りのみちより出て富士のすそ野をとをりて伊豆の関へゆく
るみちりとこそうれせきハ富士山と足るふのるをくりけるを足
柄ハこのことりとこ云今乃清見ハ海をこをりて田子の浦をもと
こをるハ中古よりのみち也富士ハ海ちかき山なれハ
ほとゝぎすハ海ちかきをよろこひまよりとハ云安云昔ハくまこり海やとこをり
くるふ波のひゃうをもりてこをりをひゃをりとハ云仙臣ハ

大船　介　真楫　繁　貫　水手出去之
おほふねの　ゆたのりかぢを　しじぬきて
奥　將　深　潮　者　干去　友
おきはふかみか　たまさかにいぬこと
伏　超　從　去　益　物　乎　間　守　余
みてかひりやりおを　ひまもりわ
所二打拍一ぬるさま　浪　不歟　為而
うちぬるされぬはりうへとて

作者未詳

時とふ不今ハきう時ニ 後時乃ち波の時ハとやりめくれハ波
のうへとをんとそて立ふりてはをうつてるとそ又云波をかうつてるとそ
るき波をねはこひひまくとめ波こふきめは男波の事よちいさき波
ゐを云波こふきもち波のすよとをこさくはのひまをうつてる
れいいまくりを云暑注 五来ル考乃くこ乃ハぬれねるしうく
まふあやくねまくハ南北乃和をこまきそ古年乃失をうるす
乃くこなもよとり出まとめる 万葉集ニよこりまをこ南の
かたいちよ河こうみすいちくとめ

いそうくきーのう 石灘 岸之浦 廻尓縁浪
岩間ゆ和或往去こ 遠尓来依 者香言之将繁
玉仙ひ者の間ゆふ事 磯之浦来依 白浪反 作
る波こハ恨てよふさ
らへきされいこハ 過 不勝それイ者 雄尓絶 多倍イよ
神クラクラかもれ すきそてさこハきふゆこ
いこのハの数ふ喻 淡海之海 浪をと恐イる多盆風守
うのうへきさる あのみの海ある子ねろうと風まもり

磯乃浦紀行 上古序
也浦のみ事よ舟をこ
きつりてをあへすの
らこまされーともれ
こそイゆふ笑明

乃みのうこハ 風をもり日もり待ので舟をうこハをて年ゆんこ
あふををうてのみ乃てをまうをゆんこをくくこ
あさこみきする あさこけいあクくイあさまきと和スきる風
風こうをねちの初かをうあクくイあさまきと和スきる風
くすれも風吉く我をよせとこうへをりれと自
由をねさうる喻心

寄浦沙歌二首

作者未詳

紫之名高浦之愛子地
柚耳鰯而不寐香将成
もゝ乃中乃名こそ立ちのまこもふ
浦をにと栄ニハをのつう修行も
そての子ふまてねするものん

いつくふや砂地よハ猶
られぬ事をいひて君
よ袖のしほれて後ふ
名をもきゝて歌也
とよくにのきし此濱へ
こよくに豊前也ほ
とゝ云のおほの濱ハ泉州
其おこと序言之よ
あをいはすくあるし
あり心ありて我思ひそ
もすくあれハ歌をに六
すくなりて手に理し

1393 豊國之 聞之濱邊之 愛子地 真直之有者 何如將嘆
とよくにのきくのはまへのまなこちの
まなをとめしいつしハあかなけりん

寄藻歌四首 作者未詳

1394 鹽滿者 入流磯之 草有哉 見良久少 戀良久乃太寸
しほみちくハいりぬるいそのくさなれや
みらくすくなくこふらくのおほき

1395 奥浪 依流荒磯之 名告藻者 心中尓 疾跡成有
おきつなみよするありそのなのりそハ
こころのうちにとくとなりけり

とかみくハ入ぬる 袖中抄云濱成式云しかみて入ぬる礒の草なれやし
入る日すくよく 道ある哉おほみ 數不見譬如潮間之礒草盈時不見
落時繞見故以塩爲喩 今此式を付く事ハ見るしす
くあくこみしのかけまとも此式ゝハ見る日すくあく此る

袖おほくゆるゝ云り古今同事し 下略 呂東 しかみて八入ぬる礒之八潮満不れ
ハおほ此人ゆるし しかれみつる時ハしち磯の草をしとしかれ成る時わ
ふにゆる草ふ云人をいてみすくすくみすて此るハ心を
おきつなみよする 波よせくる礒のなのかくハ浮流てうちさをこに
まくく心のうちにとくなれりと名なるとをみて宣るや
むらさきのなたかのうらのなのりそハ
つまなきゝ人のあひく
をまつとしれをと
いそに館こことのかり
みりかなひ心をまつ
磯なるを表ぎてね
まゝなみの心かも
いそなみこゝすべ八恐し
しかすかにさすかに
ちる人のきひしかき八悪し
あらしよハみくくまし

1396 紫之 名高浦乃 名告藻之 於礒將靡 時待吾乎
むらさきのなたかのうらのなのりその
いそになひかんときまつわれを

1397 荒礒越 浪者恐 然爲蟹 海之玉藻之 憎者不有手
ありそこすなみハかしこししかすかに
うみのたまものにくくハあらすて

寄船歌五首 作者未詳

1398 神樂浪乃 四賀津之浦能 船乗尓 乗西意 常不所忘
さゝなみのしかつのうらのふなのりに
のりにしこゝろわすれねわすれす

石橋 八十之 鴛鴦平 榜松介
とこしへにかくしもがもと
乗西 情 志 不得 裳
のりふねのこころわすれず
鴛傳 足速乃小舟風守
まもりたまへやまとたけるの
年 者也經 南 相常幽無 二
とこしへにあるべきいはほ
水霧 相 奥津 小嶋介風平疾見
みわたすかぎりなきつ海の風をいたみ
松 緑 金都 心 者 念 籽
おねよせかねつつこころもなへに
殊 放 者 奥從 漑 糞 湊 自
遊着經時 介 可放 鬼 香
へだてふこころさくへまさるのう

ありくらんことはりもりもるをそう制せる人をそうしもまるいふ喩心
ここさけいおきたまけるめ ここさけいはこいまをいみへそいこ神さけるめ
いかけやくさけうんこと へたるふこい他田磯ひつくをこ栗毋心事乃あるうこさき
うをいつみさけんこまうふるくあくにさけよこうきこらふまりて御ふりつくきまうすうらいこと
やはさこうるこうの 旋頭歌一首 作者未詳
行幣心いはふ杉原こそ 幣帛取神之祝我鎮齋杉原
三輪乃神あれても 三輪乃神あれても
動ろかれくさきの私 焼木伐殆之國手斧取奴
我心松遠宍塚るひ 我心松遠宍塚るひ
のこのてなの葉れりく
きうめやもうふ
雑挽 誰乃挽歌こふ
ハけてふ鼓へる
くんあすわるそ

挽歌
雑挽 十二首 作者未詳
鏡 成る 吾 見之 君平 阿婆乃野之
かゝみあすわりこをこうたれ野の 花 橘 之 珠 介拾 都
もるこうるれこたひり
蜻 野 叫人 之 懸介者 朝ゐる薄る子痛
なきう野を人乃くれいまつくく

君之所一咫 嵩不病
きみがおりたつたかねをみればしらくもいづる
秋津野ゆ 朝居雲之失去者
あきつのにあさゐるくものうせゆけば
前裳今裳無 所一念人
むかもこもなもなきひとおもわゆ
隠口乃泊瀬山尓霞立
こもりくのはつせのやまにかすみたつ
棚引雲者妹尓鴨在武
たなびくくもはいもにもあらんかも

秋津野ゆ朝居雲之失去者
あきつのにあさゐるくものうせゆけば
前裳今裳無人念
むかもこもなもなきひとおもわゆ
隠口乃泊瀬山尓霞立
こもりくのはつせのやまにかすみたつ
棚引雲者妹尓鴨在武
たなびくくもはいもにもあらんかも

蜻野ハ中抄紀伊ヨシ人乃名乃所レ云歟
あきつのゝ
おられをみつゝこしイ人乃くまにあさまきしと長歌
おられをみつゝこしイ人乃くまにあさまきしと長歌
一書乃反歌曰
一ささとりの
ささとりの
野乃上尓朝雲乃薄尓不レ知レ
のゝうへにあさくものうすにしらえ
とりとゝひ一本云ひやまとく今乃あきの人乃
とりとゝひ一本云ひやまとく今乃あきの人乃
上も妹尓もとゝ文選高唐賦也
うへもいもにもとゝ
こゝろくもとつせの山もしもあやに妹乃
こゝろくもとつせの山もしもあやに妹乃
情尓不レ乗者山川乎
こゝろにのらねばやまかはを
なみてきにけりいもがこゝろにのらねば

心もて
こゝろもて
杜言逆言ヲ
もとことさかごとを
杜言逆言ヲ
もとことさかごとを
こゝろなきものにあれかも
こゝろなきものにあれかも
吟偽て語らふ
ぎんぎて
吟偽て語らふ
ぎんぎて
寒尓
さむに
寒尓
さむに
あさごろもひもとかゝずひとりかも
あさごろもひもとかゝずひとりかも
黄葉の比ろ
もみちばの
黄葉の比ろ
もみちばの
移りゆくみれば
うつりゆくみれば
秋山乃
あきやまの
秋山乃
あきやまの
木葉乃
このはの
木葉乃
このはの
よりてこもりくのはつせのやまもみちばの
よりてこもりくのはつせのやまもみちばの
支妹ハ二世ともに
せのいもは
支妹ハ二世ともに
せのいもは
中あれハ
なかあれは
中あれハ
なかあれは
さんとする心消し
さんとするこゝろけし
さんとする心消し
さんとするこゝろけし

杜語香逆
もとことさかごとか
杜語香逆
もとことさかごとか
言哉隠口乃
こともなきこもりくの
言哉隠口乃
こともなきこもりくの
泊瀬山尓
はつせのやまに
泊瀬山尓
はつせのやまに
廬為云
いほりせりといふ
廬為云
いほりせりといふ
秋山乃
あきやまの
秋山乃
あきやまの
黄葉可怜
もみちばあはれ
黄葉可怜
もみちばあはれ
浦觸而
うらぶれて
浦觸而
うらぶれて
入西妹者待
いりにしいもをまつと
入西妹者待
いりにしいもをまつと
不来
こずけらしも
不来
こずけらしも

世間者信
よのなかはまことも
二代者不レ往有之
ふたよにはゆかざりけらし
世間者信
よのなかはまことも
二代者不レ往有之
ふたよにはゆかざりけらし
過
すぎゆきし
妹尓
いもにこふ
不相
あはぬ
念者
おもへば
過
すぎゆきし
妹尓
いもにこふ
不相
あはぬ
念者
おもへば
いもにあるごとし
いもにあるごとし
福イさきくの
さきくあれと
何有
いかにあらむと
人香
ひとのかも
黒髪之
くろかみの
福イさきくの
さきくあれと
何有
いかにあらむと
人香
ひとのかも
黒髪之
くろかみの
白成
しろくなりぬる
左右
までに
妹之音聞
いもがおとづれ
白成
しろくなりぬる
左右
までに
妹之音聞
いもがおとづれ

吾背子乎何處行目跡
わがせこをいづちゆきめとさきくやと
吾背子乎何處行目跡
わがせこをいづちゆきめとさきくやと
幸竹之
さきくさの
幸竹之
さきくさの
背向尓寝之
そがひにねしが
背向尓寝之
そがひにねしが
今悔
けさくやしも
今悔
けさくやしも

我不幸やくうせ妹
うの香依ぬ被さく
わりせとをいちゆりめ
乙安云さき竹乃そう
ひかこハ竹をおきて
うちあせよちを
ふ里東さき行のこハ
うくいかこいそん訓訳
也ねくくくいかこ助里
男乃死別を歌く女
乃ものこかく走ねと
へらもこてはて
乃世よういちかりん
こ等のさ手てのハ中乃ふくに有きてけるきの今悔きと
かくけりかけの亂尾童麥秋ハこれをて在ほるりけこハ
在るをもーれを子れ尾おこいきくきれるとりさ云こ仙点ハ

庭津鳥下雛乃奇尾乃亂さてり尾乃
かくけりかけのーれちりこれちの
長心毛不所念鴨
ありきこころもおもわくねるも
萬枕相巻之兒毛在者社
こともまてつのきこもけくハこう
夜乃深良久毛吾ちう惜責
我乃ふらくもわきお子せめ
玉梓能妹者珠種足氷木乃
一つもたさ乃妹そ一有りしのひきの
清山邊蔣散漆
きよきさ中きくよきけいちりめる
一云ーまたさ乃妹いえりも見しめ
玉梓之妹者花可毛足日本乃
此山影尓麻氣者失
こ乃中もりけりいちりめる

さくりなと和ス哥心ハ序心ハ今乃別乃処ハ子よりハ来のくすし
ちれすといふこそおくきこもしおくりてふこ在ほるれは吹ふ心
こし枕乃ひまきーまと萬枕い宮枕乃ーこの心おきーまこハ話
枕りまもせし女や二人おてこそ宮のかくるきもおもひすよハせめと
乙枕さ乃妹乙梓いと本もれいかめてし乙梓とい妹を梓
弓きてくる玉梓乃妹しいもはさ山乙ハ彼妹を葬しこおをみけ
いかに失めるこうくよ山ニ妹も泣りてきき歌さ
一云乙ハさ乃妹いえりも珠とそとりわく斗やきハ円乙安云児泉
を話て例るをおきまの
妹とそこいてりめる
おこ乃海をあさこき
八千おおこの海我神
海中小ちうちくよ
又枕ハ丹ほるまこよくよ山ニ乃舟中小て鹿の声ハてよりハ或ハ暁ハ或ハ
あくれ後ふとそ此

鹿子曽鳴成可怜其水手
おこうちを多こきこれいちみおかく
兒乃海平朝榜来者海中尓
かこうるあくれそのりこ

萬葉集巻第七

真享二年八月九日筆而九月十七日於新玉津嶋月下終此一巻之功